



五十間鼻無縁仏堂

## 震災の記憶

新倉 太郎

災害は前触れもなくやって来ます。

九六年前の大正一二年（一九二三）九月一日。関東大震災。

九年前の平成二三年（二〇一一）三月一日。東日本大震災。

一九二三年の災害は、前時代の江戸の面影と息吹を消し去りました。東京の中心部はすっかり灰燼と化しました。しかしそれは取りも直さず、この災害がこの地（現在の大田区）の発展のエンジンになったことを意味します。大きな被害が生じた都心からの人口流入に拍車が掛かり、活気に満ちた都市がこの地に誕生します。人が増えれば文化と芸術と思想が大繁盛するのは、古今東西同じことですね。二〇一一年の災害も、ひとつの時代の終焉をもたらしたと云えます。「戦後」を形づくっていた「何か」が崩れ落ちました。あのとき（二〇一一年三月一日）のことを覚えていきますか。時代の終わりと新しい時代の始まりを感じた人は少なくないはず。大災害を経験した人は優しく

なります。そして、私たちはこれからも災害に向き合って生きていかなければならない、ということであらためて思いました。

一九二三年（大正一二）当時、蒲田のあたりは一部を除いて田んぼが広がる田園地帯でした。周辺の集落で最も大きく、人口が多かったのは、羽田だったようです。そして、この年の九月一日。相模湾を震源地とした大地震が発生しました。軟弱な地盤に立地する羽田町は液状化により、地盤が崩れほとんどの家が倒壊しました。大森から南下して森ヶ崎、羽田と家々はほぼ全半壊でした。ぺちゃんこにつぶれる家のなんと多いことか。

蒲田町の工場群にももちろん被害がありました。広大な田んぼを購入して埋め立て、その上に建物を構築した黒沢工場は、四棟が全壊したそうです。三省堂、新潟鐵工所など、移転したばかりの工場にも大なり小なり被害が発生しました。

現在の羽田六丁目。飛行場と川崎の工場群が指呼の先に望める多摩川の河口の突端にその角塔婆と無縁仏堂はいまも存在します。「五十間鼻無縁仏堂」。

由来が書かれた看板には、こうあります。曰く「創建年代は不明ですが、多摩川、また関東大震災、・・・（中略）・・・かなりの数の水難者が、漂着しました。・・・（後



長享山薬王院 大林寺

略」とあります。羽田の人たちは自分たちも家をなくした被災者であるにも関わらず、流れ着いたたくさんの方の遺体を丁寧に取り扱い、近隣のお寺で供養したそうです。

また、梅屋敷商店街が第一京浜を東に越えて、商店街を延ばしたその先、大森中二丁目の大林寺には、「大震災供養塔」という大きな石碑が本堂の裏手に立っています。大森海岸の海苔養殖業者たちがこの石碑を建立し、そして毎年九月一日には、住職を舟に乗せて海上供養を行っていたそうです。海苔の養殖場にも多数の遺体が流れてきたのですね。

関東大震災では、発生がちょうど昼食準備中だったので火を扱っていた所が多かったことや、日本海に台風が進み、その台風に向かって、西風が吹いていたことなど、悪条件が重なり、東京の都心はほぼ焼き尽くされてしまいました。人々は火災から逃れ、水を求めて隅田川へ。そして多数の人々が隅田川で水死、圧死したということです。その遺体が潮に流され、大森海岸から多摩川の河口へと流されました。

このような追悼碑をみたとき、わたしたちは、二〇一一年（平成二三）三月一日を思い出さないわけにはいきません。津波は容赦なく東北の太平洋岸を嘗め尽くし、寄せた大浪は凄い勢いで還っていき、大勢の無辜の人々を沖に引きずり出してしまいました。水は流れ、そして潮は動きません。

南西へと流れていた多摩川が六郷の土手に行く手を阻まれ、大きく南に蛇行するその土手のすぐ近くに安養寺という真言宗のお寺があります。このお寺の境内に「大震災横死群霊供養塔」という石碑があります。関東大震災で不慮の死を迎えなければならなかった人々の魂を供養する、ということでしょうか。

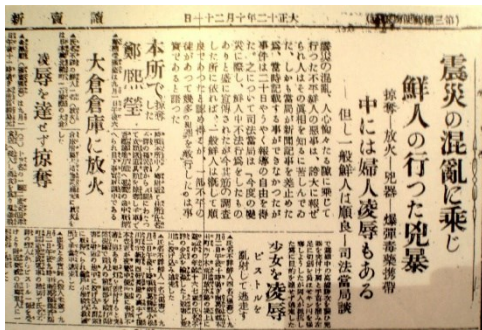
そして、池上本門寺には「大正拾二年九月帝都震災殃死者之霊供養塔」が総門をくぐり、長い階段を上ったその右側にあります。関東大震災という災いによって死ななければならなかった人々の魂を供養する、ということですね。

さて、この未曾有の大災害、関東大震災から一〇〇年近く経とうとしています。すでに生で体験した人はほとんど鬼籍に入られています。経験を直接語る人が居なくなると記憶は坂道を転がり落ちるように風化していきます。天然色だった記憶もあつという間にセピア色になります。

こうして、災害の記憶は遠い過去のものになります。この関東大震災のとき、羽田沖にたくさんの方の遺体が流れてきたことを語る人はもういません。また、わたしたちは震災の惨禍自体もふだんの生活では思い出すこともなくなっています。しかし、語る人はいなくなってしまっても、震災が歴史に埋没してしまっても、追悼碑が残っています。震災の遺構がほとんど存在しないこの大田区では、この震



安養寺  
大震災横死群霊供養塔



読賣新聞 大正12年10月21日

災のことを思い出させてくれるこのような碑の存在はとても大切だと思っております。

九年前の東日本大震災を忘れないために、被災地ではたくさんの記念碑、モニュメントが建てられています。多くは被害の大きかった所、たくさんの人々が非業の死を遂げたその場所の上に建ちます。また、津波の被害を繰り返さないために、各地の津波到達点に記念碑が建てられています。そして各地の津波到達点を結んだその線に沿って桜を植えていくというプロジェクトもあります。あの震災を経験したわたしたちは、そうやって震災の記憶を後世に残す努力をしているのです。

それはなぜか。

それは、この次の大災害で犠牲者を出さないようにするために他なりません。悲劇を二度と繰り返さない。という強い願いのためです。災厄を経験した生存者がいなくなるときの記憶の伝承は、書物の中にだけあるものではありません。土地にもあります。むしろ土地こそあるのです。その地にある遺構や記念碑、そして祈念碑。そういうものをみて人々は、ちよつと立ち止まり、その悲劇を繰り返さないようにしようと、経験した人は心から思つてほしいから、碑を建てるのです。

関東大震災において、わたしたちが決して忘れてはならない事柄がもうひとつあります。

『不逞鮮人が六郷橋を渡つた』

流言飛語により、在日朝鮮人が多数殺されました。正確な数が把握されていませんが、何千人の単位です。誰が殺したのでしょうか。住民による自警団、警察、軍隊……。治安を維持する人たちによつて殺されました。どんなデマだったのでしょうか。伝える処に抛れば、在日の朝鮮人が徒党を組んで、殺傷、略奪、放火をしている。そして井戸に毒を放り込んだ。……。などなど。まったく穏やかでない話がまことしやかに被災地に広がり、朝鮮人とみるや自警団は彼らを拘束し、殺してしまつたようです。

警視庁はこの不逞鮮人というものが流言飛語であり、事実ではない、と正式に認めたのは大地震の翌日、九月二日のことでした。・・・という事は、大地震発生からほぼ二四時間は野放し状態で、在日朝鮮人は殺され続けたわけです。

このことから、わたしたちはたくさんの教訓を汲み取らなければなりません。その情報は本当のことかどうか、ということをしつかり精査する、ということでしょうか。熊本地震のとき、動物園からライオンが脱走し、市内を徘徊している、というデマにどれだけの人が恐怖を感じたか、想像してください。

とは云うものの、それが事実か嘘か判定するすべを持たなかつた、九五年前の被災地の人々の不安はいかばかりだったでしょう。住む家をなくし、着の身着のまま、不安

